

会 報



令和8年7月
第151号
東京都公立学校
情緒障害
教育研究会

新たな時代を拓く

情緒障害教育の羅針盤

～次期学習指導要領の明示に寄せて～

東京都公立学校情緒障害教育研究会会長

江東区立元加賀小学校長 小林 英忠



今年度はいよいよ次期学習指導

要領の全容が明示される、教育界

にとって大きな転換点となります。

特に情緒障害教育、ひいては自閉

症・情緒障害特別支援学級（固定学

級）や特別支援教室を巡る環境は、

今まさに「個別最適な学び」と「協

働的な学び」の一体的な充実とい

う大きなうねりの中にあります。

今回は、明示される新学習指導

要領の動向を踏まえ、私たちがこ

れからの情緒障害教育において大

切にすべき視点について、会員の

皆様と共有したいと思います。

【ウェルビーイング】

次期学習指導要領において、キ
ーワードの一つとなるのが「ウェ
ルビーイング」です。これは単なる
一時的な幸福感ではなく、子供が
自身の特性を理解し、社会の中で
自己実現を図りながら、身体的

・精神的・社会的に満たされた状態
を指します。

情緒障害教育の対象となる子供
たちは、感覚の過敏さや対人関係
の構築における困難さから、しば
しば自己肯定感を低下させがちで
す。新学習指導要領では、知識習得
のみならず、「自立活動」を基盤と
した情緒の安定と、学ぶ意欲の源
泉となる心理的安全性がいつそう
重視されると考えます。

【生成AI・ICT活用】

新学習指導要領では、特に特別
な支援を必要とする子供たちにと
つてのアクセシビリティの保障が
強く打ち出されています。情緒障
害教育におけるICTは、単なる
ドリル学習の道具ではありません。
例えば「見通しをもたせるため
の視覚的なスケジュール管理」「対
面では表出しにくい感情を伝える
ためのコミュニケーションツール

都情研ホーム
ページでもお
読みいただけ
ます。

（ホームページは、そ
の他に、研修案内や
「みちびき」のバック
ナンバーなど情報満
載です。）



の活用」「生成AIを活用した、

個々の興味・関心に合わせた教材
の個別化」等、これらは、子供たち
の「できない」を「できる」に変え
る強力な武器となります。すなわ
ち最新のテクノロジーを柔軟に取
り入れ、個々の認知特性に合った
学びのスタイルを確立することが
求められてくると考えます。

【非認知能力の育成】

情緒障害教育において、大きな
課題の一つが「集団の中での自己
調整」です。新指針では、他者と協
調し、多様な価値観を認め合う「非
認知能力」の育成が強調されると
考えます。

自閉症・情緒固定学級や特別支
援教室という少人数の守られた環
境から、交流及び共同学習へと学
びを繋げ、社会性を育むために、
「安心できる居場所」の確保と、
「適度な挑戦」のバランスが重要
です。失敗しても許される心理的
安全性を土台としつつ、スモール
ステップで他者と関わる成功体験
を積み重ねるプロセスが、新学習
指導要領で求められると捉えます。

【専門性を生かした連携】

東京都の特別支援教育は、長い

歴史の中で豊かな実践を蓄積して
きました。しかし、近年、特別支援
教室の利用者増に加え、通常学級
における支援ニーズも多様化して
います。

新学習指導要領の実施に向けて、
私たちに求められるのは、情緒障
害教育の専門家として、個々の子
供がもつ行動の困難さやその要因
を理解し、それを学校全体の共通
理解へと繋げていくことです。そ
のことから、スクールカウンセラ
ーや関係機関、そして保護者と手
を取り合い、「ハブ（結節点）」とな
る役割が、これまで以上に期待さ
れることは間違いありません。

【まとめ】

学習指導要領が変わるというこ
とは、社会が子供たちに望む姿が
アップデートされるということだ
す。しかし、どんなに時代が変わろ
うとも、情緒障害教育の根幹にあ
る「子供の心に寄り添い、その特性
を宝物として磨き上げる」という
ことに変わりはありません。

新学習指導要領という新しい地
図を手にとるとき、私たちは戸惑
うかもしれません。しかし、本研究
会には、共に悩み、実践を語り合え
る多くの仲間がいます。本会が、変
化の激しい時代において、会員の
皆様の確かな羅針盤となり、東京
都の子供たちの明るい未来を照ら
す一助となるよう、力を注いでま
いりたいと考えています。

鼎談「チームで育てる専門性

巡回指導を支える拠点校モデルの現在地と可能性

「巡回先との協働をどう作るか、拠点校のマネジメント機能を問う」

登壇者…創価大学 教職大学院教授

渡辺秀貴先生

江戸川区立大杉東小学校指導教諭

多田 勝先生

江戸川区立第五葛西小学校主任教諭

黒須 真希先生

鼎談内容を広報部で書き起こし、まとめさせていただきました。紙面に限りがあるため、お話のかなりの部分を割愛せざるを得ませんでした。それでも、とても示唆に富む内容ですので、最後までお読みいただき、今後の指導に生かしていただければと願っています。(広報担当)

※鼎談の中で、会場より実際の経験からのお話を引用させていただきます。

一 東京都の情緒教育のあゆみから、現在の拠点校方式による特別支援教室への流れ

(渡辺)「通級による指導」の法制化が一九九三年に行われ、二〇〇七年に特別支援教育へ転換されました。その流れの中で、通級指導学級の設置も急速に進んでいきました。二〇一六年から拠点校方式の現在の形が取られたのです。

(黒須) 特別支援教室に移行して、

かつては重めのASDの児童が多かったのですが、LD、ADHDの児童が増え、ASDの知的には高い児童、一見ASDに見えない児童も増え、間口が広がってきたと思います。指導して気を付けなくてはならないと思ったのは、診断名がADHD、LDの児童も様子を見ると、ASD傾向か、別の課題かなど、いろいろなタイプの児童が通ってくるようになった分、その課題の見取りなどが難しくなってきたところですね。

(渡辺) 制度が変わる転換期には、同じ児童を対象に教育活動をしていても、視点を変えなくてはいいけないということですね。当初は、通級指導学級を設置し、その学級に他校からお子さんが通ってきていました。原則、どここの自治体も保護者が送り迎えをすることが前提にあったので、通級指導学級で指導・支援を受けさせたいと思っている家庭でも、実現できない状況もある

ったことから、子供が動くのではなく、子供は在籍校にいて、教員が動くという制度になったのです。そうすると、当然、支援を受けたいという子供が増えていったということになると思います。

(黒須) 私が通級担任になった当初は、週二日八時間の通級で、朝、登校して、身支度をして、小集団指導、個別指導をして、給食も一緒に食べ、掃除もして在籍に戻すことができました。それから通っていく児童が増えて、一日四時間の通級が主流になってきました。一日の全てを通して指導を行っていました。通級での生活の中に、その児童の課題を落とし込んで指導することができていました。「自分のことは自分でする」と教室の決まりとして、身の回りの整理整頓が苦手な児童も、身支度を繰り返して行わせることで、習慣化することができていました。「話を聞くとときは静かに聞く」「手を上げて指さしてから話をする」「自分の番まで待つ」と繰り返し伝えていくことで、学習態勢や基本的行動様式も身に付けさせることができたと思います。当時、通級の持ち物に体育着と風呂敷があり、運動指導の時間は必ず体育着に着替えます。「しっかりと畳んでそれを風呂敷に包む」「結び練習をする」「蝶結びにする前の片結びの練習をする」こともさせていて、手先の不器用な児童も頑張っていました。全員給食当

番もするので、「こぼさないように器に盛る」「落とさないように牛乳を配る」「食べる時も右と左としっかり持って、箸を使う」ことなども、感覚統合を特別に意識せずに、生活の中で指導できていました。

掃除の時間も、「雑巾をしぼる」「濡れた雑巾で床拭きをする」ことは大変だったのですが、体幹の弱い児童も、毎週水拭きをすることでできるようになり、「頑張ったね」「偉いね」と褒めていたことを思い出します。運動の時間も、運動機能を高める「サーキットトレーニング」などだけでなく、「勝敗を受け入れること」や「チームで作戦を立てて相談すること」を目指すこともできました。それぞれの児童に応じ、重点的に頑張らせようと決めて指導していました。他に、ライフスキルの向上を目指すための時間として、実際にスーパーに買い物に行き、材料を買って調理実習をする、野菜を畑で育て、できた野菜で調理をする、校外学習に行くなどもできました。在籍学級や家庭で般化をする前段階として、通級の中で練習を積む時間もたっぷり取ることができたのです。

すべての活動を通して、その児童のソーシャルスキルやライフスキルを高めていくことができていたと思っています。

(渡辺) 拠点校方式、特別支援教室とは違うイメージですね。通級の児童の生活や学習の困り感を丁寧

に見て、プログラムを作り、いろいろな活動、支援をしていたということですね。

(黒須) 通級指導学級では、専門性の高い指導を目指して、研修を積み時間もありません。みんなで一人の児童の課題や指導について考える時間を十分に取れたと思います。クラスに適応するためではなく、将来を見越して何が必要かと考えて指導ができたのもメリットだと思います。保護者の送り迎えもあり、連携が取れるという点もそうです。保護者同士が情報共有しながら悩みの相談をし合ったり、先輩の話を聞いたりする時間もとても貴重だったと思います。

二 拠点校運営の現状と課題、そして改善の取り組み

(多田) 現在の拠点校方式では、児童の数が増加したことが一番のメリットだと思います。保護者の送迎がなくなったことや送り出す担任の安心感が高まったこともそうです。児童自身も自分の学校なので、安全面の確保という点でも、増加の要因になっていると思います。他のメリットは、担任との連携が密に行えることだと思います。巡回指導教員が在籍学級を参観でき、児童の困り感やがんばりが見られるので、それを担任と情報共有できるのは、今までになかったメリットだと感じています。一方、デメリットは、時数が減っていること

です。今は一、二時間ぐらいが主流だと思います。また、小集団指導が組みにくいことも課題です。今、自校で児童の特性を見ていくと、特性が合ったとしても多くて四人くらいで、意図に沿った小集団指導を行うのが難しいことが課題になっていると思います。

(渡辺) このあたりのことについて、会場にいらっしゃる、都情研に長く関わっていらっしゃる上山先生(立川市立第八小学校指導教諭 上山 雅久先生)に聞いてみましょう。

(上山) 通級指導学級時代から特別支援教室になって十年たって、成果と課題をA Iに聞いてみました。成果は在籍校内での支援定着、担任との即時連携、早期支援の拡大、校内支援体制の可視化、保護者の心理的ハードルの低下などでした。一方、課題で挙げたのが、指導者の専門性低下、指導者養成の仕組みの不在、専門性の希薄化・一般化、評価の不統一、質の保証の困難、専門性の蓄積が組織に残らないなどでした。指導の個別化や小集団の行われ方については今回のこの研修と大きな関係があると思います。考えてみると、私は若い頃、通級指導学級の面談で、記録を書きながら修行させていたとき、先輩方から現場で学んでいくOJTの部分が多かったです。それができたのも小集団指導をしていたからだと思っています。LD、A

DHDは行動調整の課題などの面からやはり小集団が必要です。また、ASDの社会性の部分はコミュニケーション、対人関係、集団参加に課題があるため、小集団のニーズがあります。

昨年、夏季研究大会で講師の梅永雄二先生は、「就労でのつまずきがASDは圧倒的に多い。その中でもライフスキル、職業リハビリテーションというソフトスキルの部分の課題が大きい。十五歳までの義務教育で何をしていくかが大変大事だ。」とおっしゃっていました。子どものニーズとしても小集団は高く、指導者養成・育成に関しても、小集団でOJTを進めるところが大変大きいと思っています。

(多田) ASDの児童で、個別学習ではできるけれど、学級に戻ると難しいという、担任との会話が大変多くあります。重要なのは小集団だということです。小集団の「児童の特性に合わせた活動」は、次の段階に進むためのステップでもあります。また、OJTという観点もとても勉強になると思いました。

(渡辺) 制度改革のときに大きな課題がついてくるのは当たり前です。複数で特別支援教室に巡回し、そこで児童を小集団で指導・支援します。教員が学び合い、子供も集団の中で学ぶというシチュエーションを作りにくいのが現状ではないかと思っています。これは児童と教員の数も関係があります。欲しい

だけ教員が配置されるわけではなくからです。このようなことは、校長会をはじめ、いろいろな機関が声を上げていく必要があります。一方で、教員が足りない、教育予算が厳しいなど、政治的な行政課題から、願いがすぐに実現するとは難しいかもしれません。

(多田) 指導時間の確保や効果的な小集団指導の行い方、また、児童数の増加に伴い、教員数も増えたが、その分、教員の質はどうかというところに今の課題があると思います。今後、拠点校運営を行う中で、管理職と意見を交換することがあるかもしれません。拠点校内でどのように知識を上げていくかなど、拠点校運営に一つ活路があるのではないかと思います。

(渡辺) 都情研の研修会などに参加したときは、ネットワークづくりを意識していくとよいと思います。研修会の中では聞けなかったことも後日、相手の学級に連絡して「お聞きしてよいですか」というやりとりをし、裾野が広がっていくとよいと思います。

会場にいらっしゃる先生にお話を聞いてみましょう。都情研に長く関わっていらっしゃる齋藤先生(千代田区立神田一橋中学校主幹 教諭 齋藤典子先生)、お願いいたします。

(齋藤) 巡回指導の質を向上させるために、まず、重要なことは、管理職の理解を得ることです。拠点

校だけでなく、巡回校の管理職の先生方にも理解をしていただく必要があります。中学校で巡回指導が始まった当初は、学習場所として準備室や倉庫などを間借りして指導することもありました。生徒が安心して落ち着いて学べる環境を整えるためには、生徒の実態や支援の必要性、成長や課題についてお伝えし、特別支援教室が大変重要な役割を担っていることを主任として丁寧に説明してきました。管理職と共通認識をもつことが、運営のベース、土台になると考えています。

二点目が特別支援教室の指導体制の整備です。勤務体制や校務分掌、部活動の顧問など、調整すべき事項は多岐にわたりますが、管理職の理解があつてこそ成り立つものです。指導や支援については、各教員の経験や勘に依存した形式とならないよう、巡回指導教員間で教材や指導法を共有し、誰が担当しても一定の質の教育が提供できるように体制を整えています。また、継続性や持続可能性を確保するため、本校では必ず週に一度、一時間の巡回指導教員間による情報交換会議を設定しています。その中で、授業や面談で見えた生徒の変化や課題、在籍校や保護者からの情報を共有し、支援方法を常に更新しています。さらに、特別支援教室の運営や事務的事項についても見通しをもち、予定や進捗状況の確認

を行つていきます。これらの取組は若手教員の育成にもつながる、組織運営の基盤です。

最後に、教員の専門性向上のため、都情研修会への参加機会の確保にも努めています。外部研修を受け、得た知識を校内に持ち帰り、実際の指導に生かすことで、学校全体の特別支援教育の質を高める好循環が生まれています。教科の専門性や個々の教員経験、個性を生かした新しい教材開発に取り組む等、指導・支援方法の新たな創造にもつながっています。

通級指導から巡回指導へと形が変わり、今後も変化は続くと考えられます。しかし、その変化を恐れず、その変化を楽しみながら、新しい取組にチャレンジする気持ちを大切にしたいと思っています。

（渡辺）最後の「変化を恐れず、変化を楽しみながらチャレンジしていく」というのは、教員自身のライフステージを考えたときも、自分の人格形成にもなり、教職力のアップにもつながります。

三 巡回校との協働の質を高めるために

（多田）指導の始めや指導の終わりに、特別支援教室の担任会として時間を取っています。通常学級の補教や保護者会の受付などを頼まれ、設定が難しいことが常に悩みとしてあります。

巡回校には、その学校の文化や

管理職の考え方など私たちが触れにくい雰囲気があるにありません。変えたいと思い、話しても、「うちではそういうことはしていない」と言われてしまうことがあります。（渡辺）このあたりのことについて、都情研の会長の小林先生（江東区立元加賀小学校校長 小林 英忠先生）に伺ってみたいと思います。よろしくお願いいたします。

支援教育について、深く理解し、特別な支援を必要としている児童・生徒への教育支援について、しっかりした理念で取り組むことが、学校づくりに欠かせないです。通常の学級で学習や生活面で困難さのある児童が多くいる中で、主体的・対話的で深い学びや探究的な学びを実現することは難しいです。私は、学校経営の基盤における特別支援教育の必要性を管理職研修等で話しています。その一つに、この「巡回方式の仕組み」があります。兼務発令を受けて巡回に来る先生が力を発揮しやすい環境づくりをするのも、校長先生始め、基幹教員の先生方の役割であることとお話をさせていただきました。できるだけ拠点校の主任が巡回先の管理職にこんな方針でやりたいと話していただきたいです。

管理職でこの特別支援教育の世界にどっぷり浸かっている人はそんなにいません。拠点校でないから実態が分かってないということはあるにありません。巡回の先生が来ている時に指導を見に行くところから始めないといけないと思います。そのようなことが管理職に広がるように、区教委などに話をし、研修をしてください、もつと広げてくださいと話しています。毎年同じようなことを言い続け、できるだけ広げてもらえるようにしているつもりです。特別支援教育の理解をもつと深めていくためには、やはり管理職が一番理解し、その輪を校長会等で広げていくのが大事だと考えています。

（渡辺）管理職の方々の意識が大切です。教育界のトップにいる方が、「拠点校方式」への理解や特別

（多田）もちろん理解のある校長先生もいらつしやいます。新しく特別支援教室ができた時の部屋がコンクリートの打ちっぱなしのよう、すごく冷たい感じがしました。通常の学級で辛い思いをしている児童が、特別支援教室のドアを開けたらそのような部屋ということで、校長先生に伝えると、すぐに区教委に言ってくださいました。そのように迅速に動いてくださる校長先生もいらつしやいます。

（渡辺）各自自治体の校長会等でもお話をいただくことは大切ですが、拠点校の担当校長会があるの

で、先生方を中心に話題にしてい
ただくことは、児童の幸せにつな
がる大事なことです。

次の学習指導要領改訂の前段で
論点整理が出されています。多様
な児童にとって、授業や行事など、
教育活動を成立させるためには、
やはり皆さんの力をさらに高めて
いく必要があると思います。この
キーワードがこれからのトレン
ドになりつつあります。特に「多
様性の包摂」というところです。今
年度の都情研の研修の中でさらに
深めていただきたいと思います。

一斉画一的な教育活動、教育指
導、授業については、見直さないと
児童がついてこれられません。児
童がついてこれるように見直す必
要があります。ついてこれない
児童は不登校になっています。こ
の数がどんどん増え、公立学校は
何のためにあるのか問われています。
今、学術界では、学校に適応で
きない児童という言い方ではなく、
「多様化している児童に適応でき
ない学校教育」という言い方をし
ています。学校教育に関わる方全
員が変わらなければいけない大き
な転換期にきていると言われてい
ます。国もそう方向転換を打ち出
そうとしているところです。「誰一
人取り残さない学校づくり」とい
う言葉がありますが、まさにその
最前線に皆さんが立っていると思
います。次の段階は、通常学級の担
任の先生方との連携をどうしてい

くかということになります。

このことについて、都情研に関
わっていらつしやる平先生（世田
谷区多聞小学校主任教諭 平 聖
子先生）、お話を伺ってよろしいで
すか。

（平）私の巡回校は、特別支援に
対してのお考えのある校長先生で、
固定学級を併設の学校です。まず、
校内委員会に巡回指導教員が入っ
ています。校務分掌にも名前が入
り、巡回日に当たっていただいて
います。スクールカウンセラーも同
様で、特別支援の視点で意見を言
ってほしいということ、参加さ
せていただいています。また、担任
の先生との連携のために、専門員
の力を多く借りています。担任や
管理職の連携を密にし、私たちが
いられない間をつないでくださっ
ています。保護者のことや児童に
何かあったときに、必ず連絡が来
て、どんな対応をするか、学校に連
絡したり、担任と話したりと、迅速
に動くことができています。管理
職の先生のお考え一つで、私たち
は迅速な対応ができています。
（渡辺）専門員の存在をうまく使
われ、つながっている一つの良い
事例です。専門員はどのような役
割も担って配置されています。こ
ういう話を聞くと、いろいろお願
いしてみよう、まず管理職に相談
してみようという発想に動き出す
ことがあるかもしれません。担任
が授業の合間に巡回指導を見に来

て、児童に声をかけてくれること
があります。わざわざ来てくれ、生
で見てもらえ、児童の表情も変わ
ります。特別支援教室での姿を担
任の先生が見て、声をかけてくれ
たり、活動を一緒にしたりするこ
ともよい一つの環境づくりです。

（多田）他に、個人としての関わり
もあると思います。私が意識して
いるのは、他校とのバトミント
ンや卓球の交流試合に必ず参加す
ることです。学校内で、親睦を深める
ものに必ず出るようにしています。
担任目線で考えたとき、「このよう
な場に来ないのに、児童のことは
言ってくる」と言われるのはすご
く嫌だし、心理として芽生えてし
まうと思います。巡回のメンバ
ーが必ずいけたらよいと思い、率
先していくことを意識しています。
担任の先生とより仲良くなること
も、連携の根底として、人としての
付き合いは必要だと思います。小
さな積み重ねも必要だと思います。
（渡辺）良い関係性があつてこそ、
指導・支援が生きていくというこ
とはあります。自分だったら何が
できるか、関係性を作る方法を考
えて動き出すとよいかもしれない
です。自分が指導・支援の方向性を
実現したいならば、関係する学校
の文化理解が必要です。また、管
理職にも理解を求め、実際に最前
線で動いている者同士の関係性を
構築することも求められる専門性
の一つなのかもしれません。

四 次の十年へ・・・都情研の役割、 そしてプロ教師としての展望

（渡辺）最後に、「次の十年へ」
ということでお話をしたいと思
います。「拠点校は巡回校を支える
存在」ということを越え、これか
らは巡回校を変える存在にまで高
まっていこうということです。多田
先生や黒須先生は、拠点校の教員
が巡回校の方にいろいろな影響力
を及ぼし、結果的に学校が変わり
学級が変わり、先生が変わり、児
童が変わっていくということをお
話されたと思います。そのポイ
ントの一つとして、拠点校と巡回
校、双方の先生方の特別支援の教
育力が一緒に向上していく必要が
あります。主任を中心に実際に戦
略を立てていってもよいかもしれ
ません。そして人材育成の話とし
て、皆さんの後に入ってくる先生
たちをどう育てるかと同時に自分
自身がどう育っていくかというモ
デルを参考にしながら、その学校
の実態ではどういうモデルができ
そうかを意識して、図にできると
一番よいと思います。人材育成の
好循環を生み出していきたいとお
互いに言い合いながら日々の実践
できるとよいと思います。現在、
個別最適な学びを実現しましょう
と言われています。インクルーシ
ブ（インクルージョン）の話もそ
うです。日本の今までの特別支援
教育の良さを生かしながら多様性

の包摂、共生社会を目指した小集団をどう作っていくか、社会を生きていくのに必要な力を児童にどう養っていくかを意識していく。また、ICTの活用については先進的な取り組みを積極的に取り入れていきたいところです。拠点校から巡回しているプログラムをICTを使って、「いつでも誰でも今日は何をしていて、どういう結果があったのか」について、デジタルベースを残し管理していく。また、児童の教材教具としての活用にもさらなる工夫が必要です。ICTの活用によって学ぶ力が向上する児童もいますし、その特性からデジタルに頼りすぎることがマイナスとなる児童もいます。本来、身に付けさせたい力を丁寧に検討してICTの機能を有効活用することを意識して指導を進めていくことが大事かもしれません。「拠点校は支える存在から学校を変えろ存在」になっていくことを目指してがんばっていただきたいと思っています。

（黒須）「学校を変えろ存在」ということはなかなか難しいと思います。がら聞いていました。拠点校運営や連携について改めて見つめ直していきたいと思っています。担当の児童を一番理解していても特別支援だけでは抱え込めません。在籍の誰にどのようにつなげば一番うまくいくのかということです。それぞれの児童の良き最良のコーディネート

ネーターを目指していくことからがんばっていききたいと思っています。

（多田）デメリットに挙げられていた教員の質を改善するための一つの答えが、今ここにある都情研なのではないかと思っています。一人でも多くの先生方に参加していただくことが皆さんの指導力の向上につながると思います。また、メリットでも挙げられていた「学級担任とどこまで協働できるか」ということなど「拠点校を、学校を変えろ存在」へと高めるためには、児童が自信をもち、教室に帰る姿、それを繰り返していくことが担任の先生と児童の目線を変える一番だと思っています。そのために、我々の指導力を上げていくことは必須の課題です。これからも皆様と一緒に学び続け、児童の笑顔のために、そしてその笑顔が担任へ、担任から学年、そして学校長、学校と変えていくということにつながると思っています。これからも一緒に学び続けていきたいと思っています。

第五十八回全国情緒障害教育研究協議会北海道大会のお知らせ

【開催日時】令和八年

九月十八日（金）・十九日（土）

【会場】

一日目 札幌市立稲積小学校

二日目 札幌市立新琴似小学校

【研究主題】

エビデンス（科学的根拠）に基づ

いた支援・指導

【内容】

一日目は、公開授業、授業討議等を予定しています。二日目は、開会式、講演、実践交流、分科会等を予定。参集形式ですが一部オンライン配信も予定しています。

【参加費】一〇〇〇円

【参加にあたって】

今年度は、北海道特別支援学級教育研究連盟との合同開催となります。また、二日目を以降は五連休と重なるため、参加を予定される方は、早めに交通機関や宿泊の準備をされると良いと思います。

【最後に】

全国情緒障害教育研究協議会では、子ども一人ひとりの姿に即した支援を、現場の実践としてどう深めていくかを大切にしています。北海道大会が、子どものための支援について共に考え、学び合う機会となることを願っています。

（全国情緒障害教育研究会

事務局長 植草葉月）

第十一回都情研夏季研究大会

（東ブロック大会）

日時…令和八年七月三十一日（金）

九時五十分～十六時二十五分

場所…かつしかシンフォニーヒルズ

モーツァルトホール

（京成線青砥駅下車）

内容…記念講演・指導実践報告

《記念講演》

講師…長岡 恵理 先生

（早稲田大学発達障害当事者学生自助グループ運営スタッフ、早稲田大学校友会発達障害稲門会）

演題…ASDを中心とする発達障害のある児童・生徒の指導と就労に向けて大切なこと

今年度の夏季研究大会は、「発達障害のある児童・生徒の将来を見据えた指導について考える」ライフスパンの視点で考えた時、個々の実態に応じて優先すべきこと」をテーマに研究を深めてまいります。

今年度は午前中に運営担当の東ブロックを除く四地区の指導実践発表を行い、都情研企画運営本部の主幹教諭・指導教諭四名に指導助言をしていただきます。午後は、記念講演を行います。

なお、詳細はホームページにてご確認の上、必ず事前申し込みをしてご参加ください。

編集後記

広報に関するご意見、ご感想は、左記までお寄せください。

編集・発行

企画運営本部 広報担当

千代田区立和泉小学校 坂本夕子

☎03（3866）3939